

Title	第3回全体シンポジウム : "Rational Animals, Irrational Humans" (2月9-11日開催)
Sub Title	
Author	山崎, 由美子(Yamazaki, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2008
Jtitle	Newsletter Vol.3, (2008. 3) ,p.5- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000003-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第3回全体シンポジウム

“Rational Animals, Irrational Humans” (2月9-11日開催)

平成20年2月9日より3日間、三田キャンパス北館ホールにおいて、“Rational Animals, Irrational Humans”という題名で第3回全体シンポジウムが催された。動物、ヒトを対象とした研究を行っている様々な専門分野の研究者たちが国内外より招聘され、グローバルCOEの研究者たちとともに発表を行い、議論を戦わせた。

初日の9日は渡辺教授の開会の言葉で幕を開け、様々な種を用いた比較研究の発表が続いた。D. Lestel 博士 (ENS) により、動物の“rationality”についての様々な見解が論じられた後、A. Blaisdell 博士 (UCLA)、A. von Bayern 博士 (ケンブリッジ大学)、C. Schloegl 博士 (コンラートローレンツ研究所)、L. Castro 博士 (アイオワ大学)、A. Seed 博士 (マックスプランク研究所)、E. Freidin 博士 (オックスフォード大学)、R. Adam 博士 (ボーフム大学) による講演があった。内容は因果推論、視点取得、大脳半球機能差など多岐にわたった。比較の観点を持った推論研究では、自然な環境をシミュレートしたような場面での問題解決課題が多く利用される一方で、連合学習・古典的条件づけの枠組みによる可能性が論じられたのが印象的であった。セッション終了後、レセプションで参加者たちは親睦を深めた。

二日目は動物のみならず、ヒトについての研究も多く見られたセッションとなった。L. Huber 教授 (ウィーン大学) は様々な種を用いた実験を紹介する中で、模倣場面において、ただ単純に行動をコピーするのではなく、ある理由に基づいて模倣すべき行動を選択することが子供とイスに認められるという興味深い報告を行った。続いて、A. Young 教授 (マッギル大学)、鈴木宏明教授 (青山学院大学)、C. Teufel 博士 (ケンブリッジ大学)、且直子博士 (東京大学)、近藤紀子氏 (社研)、筆者らのグループ (山崎・小川昭利博士・入来篤史教授、理研) による発表があったが、それぞれ異なる方法を用いてヒトの社会的・物

理的推論についての発達の・生物学的基盤に迫る内容であった。休憩時間には塾内のお茶の宗匠による点茶があった。

三日目は長谷川真理子教授 (総研大) による発表で始まったが、最終日の朝にもかかわらず、子殺しの生物学的・社会的・文化的要因などをめぐり活発な議論がなされた。続いて、三村将博士 (昭和大学)、寺澤悠理氏はヒトの社会認知についての脳画像研究についての講演を行った。午後は J. -Y. Girard 教授 (IML)、岡田光弘教授による論理学からの話題提供があった。そして、3日間の日程はフェアウェルパーティーで幕を閉じた。

休憩や食事などでのちょっとした会話の中で、何を以て rational な行動とするか、という点に演者たちが苦慮していたようなことを耳にした。言うまでもなく rational という言葉は多義的であり、シンポジウムで論じられたように、事象の因果関係を正しく認知することも、ある条件下において利得を最大化するようにふるまうことも、時間的制約の中でできる限り正確に外界の情報を処理することも rational といえるだろう。このように、rational な行動に対して研究の切り口は無数にあり、解釈の仕方も多様であったために、却って研究の各論のみならず、発表者の立場や観点といった、学会発表などではなかなか聞くことのできない内容を聞いたように思う。発表後の質疑応答の時間が十分に確保されていたこともあり、それぞれの発表者の研究手法や実験対象、考察のレベルなどは全く異なっていたにもかかわらず、何が rational か、という根っこの部分の問題を十分に共有できたのではないかと思う。

なお、このシンポジウムの演者らによる論文に、外部からの招待論文を加えて、シンポジウムと同名の論文集を慶應義塾大学出版会から刊行予定であるので、ご期待いただきたい。

(山崎由美子)

